



## 日本高血圧学会 声明

### あらゆる場所での「キオスク血圧測定」を奨励する

#### 要点 「キオスク血圧とは」

- ・キオスク血圧測定とは、スポーツジムや自治体施設の一角などの公共施設や職域に置かれている自動血圧計を用いて、医療従事者の手を借りずに血圧を自己測定する行為を指す。
- ・キオスク血圧計は、我が国では自動巻き付け式血圧計が相当し、健診・検診会場や病院の待合室、薬局、また家庭での測定に至るまで幅広く用いられている。
- ・キオスク血圧測定の最大の特長は、多くの人々が血圧測定の機会を得ることにあり、高血圧のスクリーニングに適している。
- ・キオスク血圧測定は自己測定であるため、できる限り日本高血圧学会ガイドラインが推奨する家庭血圧の測定環境（座位安静1－2分後、排尿後）に近付け、測定場所と時刻を記録しておくことが望ましい。
- ・キオスク血圧測定は、機器や測定手技・条件などさまざまな課題があるものの、国民が自分自身の血圧を知るための優れた手段である。
- ・日本高血圧学会は、広く国民に血圧リスクを知っていただくため、あらゆる場所でのキオスク血圧計の設置とキオスク血圧測定を奨励し、収縮期血圧 130 mmHg 以上をリスクが高い血圧値の目安としている。

街角の小さな店などの場所・端末を意味する“kiosk”（以下キオスク、またキヨスクとも）は、血圧に関連して用いる場合、そのような場所で行われる測定（キオスク血圧測定）、またそのための血圧計（キオスク血圧計）を指す。

2025年、欧州高血圧学会（ESH）の血圧測定ワーキンググループは、国際高血圧学会（ISH）、世界高血圧連盟（WHL）の賛同を得て、ステートメント総説「Blood pressure measurement at kiosks in public spaces」（以下、本総説）を *Journal of Hypertension* 誌に発表した（*J Hypertens* 2025: in

press)。本総説では、キオスク血圧計を、筒状になった腕帯が内蔵されており、その筒の中に上腕を差し込んで測定を始めることで腕帯が自動的に膨らみ、血圧値が自動測定される装置と捉えている。我が国では「自動巻き付け式血圧計」(商品名アームイン®、スポットアーム®等)と呼ばれているが、諸外国では専用の椅子やディスプレイ、他のバイタルサイン測定装置が一体となった大型の装置も販売されている。キオスク血圧測定は、このうち特に、スポーツジムや自治体施設の一角などの公共施設や職域に設置されている自動血圧計を用いて、医療従事者の手を借りず、血圧を自己測定する行為を指す。災害時の避難所に設置される自動血圧計を用いて、自己測定する血圧も広義のキオスク血圧である。

ただし、キオスク血圧測定に際しては、自動巻き付け式血圧計ではなく、自分で腕帯を巻くタイプの血圧計を用いる場合もある。従って、キオスク血圧計とキオスク血圧測定には、定義に若干の差異が認められる。本総説では題名の通り、公共の場に設置されたキオスク血圧計による測定(キオスク血圧測定)を主に取り上げているが、医療施設の待合室での血圧測定にも言及しており、例えば群馬県東吾妻町で実施された待合室設置の自動巻き付け式血圧計による測定値と主治医による血圧測定値の比較論文(*J Clin Hypertens.* 2017; 1051)も紹介されている。このように、キオスク血圧計の設置場所としては病院内も含まれ得るが、我が国でこうした病院の待合室での自動血圧測定は通常、診察室血圧の一型と捉えられていることに留意する必要がある。

キオスク血圧測定の最大の特長は、多くの人々が血圧測定の機会を得ることにあり、高血圧のスクリーニングに適している。血圧値が医療従事者の前で測定されることにより影響を受ける現象(狭義の白衣効果)を除外することもできる。しかし、本総説内で実施されたメタ解析によれば、キオスク血圧測定値と他の方法による血圧値には大きなばらつきが認められた。これは、キオスク血圧測定では条件や方法が標準化されていないことが第一の理由である。また、専門家の目が行き届かず、測定に不慣れな者が不安を感じることも挙げられる。信頼できる関連のエビデンスも不足しており、現在、キオスク測定された血圧における高血圧の厳密な基準値は存在しないが、日本高血圧学会は後述のように収縮期血圧 130mmHg 以上をリスクの目安としている。

キオスク血圧計に相当する自動巻き付け式血圧計は、健診・検診会場や病院の待合室、薬局、また家庭での測定に至るまで幅広く用いられている。本総説では、血圧計の臨床的信頼性の評価組織 STRIDE-BP (<https://www.stridebp.org>)と連携して、いくつかのキオスク血圧計について検証結果が不合格であったとまとめている。そのため本総説では、血圧計の製造業者にはキオスク血圧計の開発製造要件を十分考慮することを求めている。ただし STRIDE-BP は、古い検証結果についても当時の評価プロトコルを含めて一段厳格にチェックしており、我が国で現在購入可能な医療用・家庭用の自動巻き付け式血圧計には問題がないことを付記しておく。

薬局における血圧測定については、ESH ワーキンググループが 2021 年に発表したステートメントで、他のキオスク測定血圧と同様にスクリーニングの域を出ないと述べている (Stergiou GS *et al. J Hypertens.* 2021;1293)。薬局測定の血圧値にはガイドラインでも基準値が定められておらず、

診断治療の確定的根拠に用いるべきではない。ただし、薬局での測定状況や測定結果を薬剤師がチェックすることで、他科疾患の患者の高血圧を疑う、処方副作用として現れる高血圧を確認するなどの意義がある。

キオスク血圧測定はさまざまな環境下で行われるが、自己測定であるため、日本高血圧学会の高血圧治療ガイドラインが推奨する家庭血圧の測定環境にできる限り近づけると良い。すなわち、測定前は飲酒や喫煙を避け、リラックスして1-2分の安静時間を取り、測定中は腕や身体を動かさず、会話を交わさないことが求められる。特に、自動巻き付け式血圧計を用いた自宅での測定は、家庭血圧の測定条件を遵守すべきである。なお、薬局や災害避難所での血圧測定値を診療の参考に用いる場合、測定時刻、服薬の有無ならびに服薬時刻、血圧の測定場所や測定状況などを記録し、専門家が参照することが望まれる。

上記より、キオスク血圧測定、また測定に用いるキオスク血圧計（≡自動巻き付け式血圧計）には、測定手技や条件などさまざまな課題があるものの、スクリーニングの意義は高いと考えられる。さらに、キオスク血圧測定は家庭血圧測定とともに、あまねく国民が血圧を自己測定し、さらに血圧測定の習慣化によって自分自身の健康意識の向上にも寄与すると期待される。現在、高血圧でない者も、健診や職域測定を含めた広義のキオスク血圧測定をぜひ行って欲しい。また、高血圧に携わる医療関係者には、キオスク血圧測定を含むさまざまな機会に血圧測定を推奨・実施し、科学的見地に基づいて対応することをお願いしたい。なお、日本高血圧学会では、今まで高血圧を指摘されたことがない方についても、測定する場所や方法にかかわらず収縮期血圧 130 mmHg 以上をリスクが高い目安として、生活習慣の改善と朝の家庭血圧測定を勧める「血圧朝活」キャンペーンを展開している。

[註] 2015年のWHLのステートメント (Campbell NRC *et al.* *JCH*2015: 913)では、「Blood pressure (BP) kiosks are “stations” where BP is automatically assessed by a device that is triggered by the individual who is getting their BP assessed.」と定義している。また、2019年のAHAの血圧測定ステートメント (Muntner P *et al.* *Hypertension* 2019: e35)では、このステートメントを引用しつつ、「Kiosks are stations where BP is assessed by a device that is triggered by the individual desiring the measurement in the absence of a healthcare professional.」と述べている。ただし、後者では血圧の自己測定が実施される家庭以外の場の例として「at work, a pharmacy, or a kiosk」を挙げている。

2025年4月3日

特定非営利活動法人 日本高血圧学会 理事長  
苅尾 七臣  
「早朝高血圧徹底制圧プロジェクト」推進委員  
浅山 敬、 大久保孝義